

彫刻家 諸井謙司さん初個展

具象から抽象まで
素材も多彩

具象の人物像から自然をテーマにした抽象まで作品は多彩だ。佐賀市の彫刻家諸井謙司さん(28)が、初の個展「鈍展」を開いている。新作をはじめ昨年の県展や美協展の大賞、入賞作など17点を展示。「今の自分を出し尽くした」という意欲作をそろえ、見ごたえある展観が広がっている。



初の個展を開いている彫刻家の諸井謙司さん

▶鳥栖市柚比町のギャラリー花やしき＝0942(83)2000＝で、30日まで。開館は午前11時半から15時と17時から20時。

「凜」(高さ60×幅20×奥行き15センチ・FRP)



身近な自然テーマに

「凜」は若い男性の立像で、左手を腰に当て正面を見つめている。堂々とした出来映えに「常々作っているモデルの人間性をようやく出せた」と手応えを口にする。

親類の双子から着想を得た「秋冬」。カモの頭部2体を一對に空間を構成した。カモの黒と白はブロンズと磁器を用いた。素材を変えて、それぞれのキャラクターを際立たせる。神話の「牧神」を扱った「角」。雄々しい角を持つ牧神が高めの台座に直立する。上から世界をのぞき込んでいる場面を作り上げた。

人間にとって身近な存在である自然は諸井さんの大きなテーマ。抽象作品也多岐にわたる。「種思」は種の形に着目してイメージを広げた。横に入った線模様は、ブロンズの表面を彫った溝に溶かした燐青銅を流し込んだ。ブロンズと燐青銅で「種」

と「水」を表現、全体に光沢感も出しながら自然の持つ力も込めた。

「風種」もFRP(繊維強化プラスチック)に、それぞれセメントや鉄を混ぜ合わせて文様を作り上げた。織りなす線の連なりで風を吹かせている。

「流考」は台座を自身の頭に見立て、そこから生える無数の枝は自身の思考という。水にろうを流して自然に固まった形を元にしたブロンズ作品。迫力ある樹木のようにそびえる。

昨年の県展で全部門の最高賞に輝いた「幕間の静寂」も展示。二人の役者が休憩している姿は面舞台の華やかさを思わせ、対照を鮮やかに浮かび上がらせる。妖精のような姿の「家守」シリーズ。衣装やポーズも愛らしく、家を守る縁起物としての用途を持たせている。

諸井さんは佐賀北高芸術コース卒。崇城大で彫刻を専攻し、同大学院修了後は研究生を経て帰郷、制作に励む。日展や昭和会展など入選も多い。ブロンズの放つ鈍い光や鈍色が好きなことから、鈍展と名付けた。初の個展に感無量という諸井さん。「一同に並べると、思った以上に気に入った作品が多かった。お客さんの反応が楽しみです」と話す。

(成富禎倫)

▶電子新聞に 複数写真



「家守」シリーズの作品